

Prospective study of objective physical activity and quality of life in living donor liver transplant recipients

田中, さとみ

<https://hdl.handle.net/2324/4474967>

出版情報 : Kyushu University, 2020, 博士 (看護学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏名	田中 さとみ		
論文名	Prospective study of objective physical activity and quality of life in living donor liver transplant recipients (生体肝移植患者の身体活動量とQOLに関する縦断的研究)		
論文調査委員	主査	九州大学	教授 後藤 健一
	副査	九州大学	教授 鳩野 洋子
	副査	九州大学	教授 橋口 暢子

論文審査の結果の要旨

肝移植患者は、移植後に使用する免疫抑制剤の影響でメタボリック症候群を発症する頻度も高い。肝移植後のメタボリック症候群予防には身体活動量(PA)を増加させることも重要であるが、肝移植後のPAの変化に関しては十分な検討がされていない。本研究は、生体肝移植患者の術前から術後早期のPAの変化を検討するとともに、PAの変化を予測する因子を明らかにすることを目的とした。PA増加とクオリティ・オブ・ライフ(QOL)向上には正の相関があることも知られており、本研究でも生体肝移植患者の術後のQOLの変化についても評価を行った。

生体肝移植患者において術前と術後3か月、術後6カ月のPAとQOLの経時的な変化を定量的に評価した。PAは加速度計を使用して一日の平均歩数と一週間の中高強度身体活動量(MVPA)を測定した。PAを増加させる因子に関しては一般化線形混合モデルを用いて分析した。QOLは自記式質問紙の日本語版SF-8を用いて、身体的サマリースコアと精神的サマリースコアを評価した。

生体肝移植術を受けた24名の患者が研究を完了した。一日の平均歩数および一週間のMVPAは肝移植前と比し、術後3か月までは有意な改善を認めなかったが、術後6か月では有意に改善した。しかし、術後6か月の時点でも一日の平均歩数および一週間のMVPAは健常者と比較すると低いままであった。また、年齢が若いこと、骨格筋量が多いことがPAを増加させる因子であった。QOLに関しては、肝移植前と比し、精神的サマリースコアは術後3か月で、身体的サマリースコアは術後6か月でいずれも有意な改善を示し、健常者と有意差がなかった。

以上、生体肝移植後6か月までにPAとQOLは術前と同レベルまで改善するものの、移植後患者のPAは術後6か月の時点でも健常者と比較すると低いままであることが明らかとなった。本研究結果から、肝移植前より骨格筋量が減少しないよう適切な食事や運動指導を行うことで、術後のPAの向上が期待され、将来のメタボリック症候群の発症予防につながる可能性も示唆され、臨床的な意義も大きい。

予備調査において、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが、いずれについても適切な回答を得た。よって本論文は予備調査委員合議の上、博士(看護学)の学位に値する論文として価値あるものと認める。

主査 後藤健一
副査 鳩野洋子
副査 橋口暢子